

『嗣書』の全文と草案本の該当部分

修訂本『嗣書』は、一行当たり十七〜十八文字、一頁に六行ずつ配し、五十七頁に渡り計三六行、約五九〇〇文字が、仮名交り文で綴られています。

草案本『嗣書』は、修訂本の二年前に著された草稿ですが、長い歴史の中で、道元禪師を慕う者に分け与えられました。香積寺広惠に残る記録からは、二十六ヶ所に分けられたことが知られますが、現在では二十六所に十四種が確認されています。それぞれ所蔵先の名を冠して〇〇寺切などと称されています。現存している草案本が、『嗣書』のどの部分に該当するのかを示しました。

《永平寺切①》
嗣書

観音道利興聖雲林寺

仏仏かならず仏に嗣法し、祖祖かならず祖祖に嗣法する、これ証契なり、これ単伝なり。このゆえに、無上菩提なり。仏にあらざれば仏を印証するにあたはず、仏の印証をえざれば仏となることなし。仏にあらずよりは、たれかこれを最尊なりとし、無上なりと印することあらん。仏の印証をつるとき、無師独悟するなり、無自独証するなり。このゆへに、仏証嗣し、祖祖証契すといふなり。この道理の宗旨は、仏仏にあざればあきらむべきにあらず。いはんや土地・等覺の所量ならんや、いかにいはむや終師・論師等の測度するところならんや。たとひ為説すとも、かれらきくへからず。仏仏相嗣するがゆへに、仏道はたゞ仏仏の究竟にして、仏仏にあざるとき節あらず。たとへば石は石に相嗣し、玉は玉に相嗣することあり、菊も相嗣あり、松も印証するに、みな前菊後菊如くなり、前松後松如くなるがごとし。かくのごときなるをあきらめざることもがら、仏仏正伝の道にあふといへども、いかにある道得ならんか、あやしむにもおほはず、仏仏相嗣の祖祖証契すといふ願望あることなし。あはれむべし、仏種族に相似なりといへども、仏子にあざるときを、子仏にあざるときを、曹溪あるとき衆にしめしていはく、「七仏より慧能にいたるに四十祖あり。慧能より七仏にいたるに四十祖あり。」この道理、あきらかに仏祖相嗣の密旨なり。いはゆる七仏は、過去莊嚴劫に出現せるもあり、現在賢劫に出現せるもあり。しかあるを、四十祖の面授をつらぬるは、仏道なり、仏嗣なり。しかあればすなはち、六祖より向上して七仏にいたれば、四十祖の仏嗣あり、七仏より向上して六祖にいたるに、四十仏の仏嗣なるべし。仏道祖道かくのごとし。証契にあらず、仏祖にあざれば、仏智慧にあらず、祖究竟にあらず。仏智慧にあざれば、仏信受なし。祖究竟にあざれば、祖証契せず。しばらく四十祖といふは、ちかきをかつゝ挙するなり。これによりて、仏仏の相嗣すること、深遠にして、不退不転なり、不斷不絶なり。その宗旨は、釈迦牟尼仏は七仏以前に成道すといへども、ひさしく迦葉仏に嗣法せるなり。降生より三十三歳十二月八日に成道すといへども、七仏以前の成道なり、諸仏普賢同時の成道なり。諸仏以前に成道なり、一切諸仏より未上の成道なり。さらに迦葉仏は釈迦牟尼仏に嗣法すると参究する道理あり。この道理をしるは、仏道をあきらめず。仏道あきらめざれば、仏嗣にあらず。仏嗣といふは、仏子といふことなり。釈迦牟尼仏 あるときは阿難にとほしむ、過去諸仏これたれが弟子なるぞと、「釈迦牟尼仏はいはく、過去諸仏はこれ我釈迦牟尼仏の弟子なり。」諸仏の仏義かくのごとし。この諸仏に奉觀して、仏嗣し、成就せむ、すなはち仏仏の仏道にてあるべし。この仏道、かならず嗣法するとき、さだめて嗣書あり。もし嗣法なきは天然外道なり。仏道もし嗣法を決定するにあらずよりは、いかでか今日にいたらん。これによりて、仏仏なるには、さだめて仏嗣仏の嗣書あるなり、仏嗣仏の嗣書をつるなり。その嗣書の爲体は、日月星辰をあきらめて嗣法す、あるいは皮肉骨髓を得せしめて嗣法す。あるいは猿猴を相嗣し、あるいは柱杖を相嗣し、あるいは松枝を相嗣し、あるいは松子を相嗣し、あるいは優曇花を相嗣し、あるいは金襴衣を相嗣す。鞣鞋の相嗣あり、竹篋の相嗣あり。これらの嗣法を相嗣するとき、あるいは指血をして書嗣し、あるいは古血をして書嗣す。あるいは油乳をもてかき、嗣法する、ともにこれ嗣書なり。嗣せるもの、得せるもの、ともにこれ仏嗣なり。まことにそれ仏祖として現成するとき、嗣法かならず現成す。現成するとき、期せざれどもきたり、もてめざれども嗣法せる仏祖おほし。嗣法あるはかならず仏仏祖祖なり。

《永平寺切②》

道元在宋のとき、嗣書を礼拝することをえしに、多般の嗣書ありき。そのなかに、惟一西堂とて、天童に掛錫せしは、越上の人事なり、前任仏福寺の堂頭なり。先師と同郷人なり。先師つねにいはく、境風は二西堂に間取すべし。あるとき、西堂はいはく、古蹟の可観は人間の珍玩なり、いづはくか見來せる。「道元はいはく、見來すくなし。」とき西堂はいはく、吾那裏に古軸の古蹟あり、甚麼次第なり、与老兄看」といひて、携來をみれば、嗣書なり。法眼下のにてありけるを、老宿の衣鉢のなかよりえたりけり。惟一長老のにはあらざりけり。かれにきたりしは、

「初相摩訶迦葉、愍於釈迦牟尼仏、釈迦牟尼仏悟迦葉仏。」かくのごとききたり。道元これをみしに、正嫡の正嫡に嗣法あることを決定信す。未曾見の法なり、仏祖の冥感して兎孫を護持する時節なり。感激不勝なり。

《大業寺切》

雪門下の嗣書とて、宗月長老の天童の首座職に充せしとき道元にみせしは、いま嗣書をつる人のつきかみの師、および西天東地の仏祖をならべつらねて、その下頭に嗣書つる人の名字あり。諸仏祖より直にいまの新祖師の名字につらぬるなり。しかあれば、如来より四十余代、ともに新嗣の名字へきたれり。たとへばおのゝ新祖にさつけたるがごとし。

《香積寺切》

摩訶迦葉、阿難陀等は、余師のごとくにつらぬれり。ときとて道元、宗月首座にとふ、「和尚いま五家宗派をつらぬるに、いさゝか同異あり、そのころいかん。西天より嫡々相嗣せらば、なむぞ同異あらんや。」宗月はいはく、「たとひ同異はるかなりととも、たゞまに雪門山の仏は、かくのごくならずと學すべし。釈迦老師、なによりてか尊重他なる、悟道によりて尊重なり。」雪門大師、なによりてか尊重他なる、悟道によりて尊重なり。道元この語をきくにいさゝか領覽あり。いま江浙に大利の主であるは、おほく

《神心寺切》

臨濟・雪門・洞山等の嗣法なり。しかあるに、臨濟の遠孫と自称するやから、まゝにくわだつる不是あり。いはく、善知識の会下に参じて、頂相一幅、法語一軸を懇請して、嗣法の標準にそなふ。しかあるに、一類の狗子あり、尊宿のほとりに法語・頂相等を懇請して、かくしたくはふることもまたあるに、晩年におよむで、

《永光寺切》

宣

ち 嘉祐十六年癸未あきのころ、道元はじめて天童山に寓直するに、隆禪上座ねんころに伝蔵主に請して、嗣書を道元にみせし、その嗣書の様は

《禪定寺切》

七仏よりのち、臨済にいたるまで、四十五祖をつらねかきて、臨済よりのちの師は、一四相をつくりて、そのなかにめぐらして、法諱と花字をつつしかけり。新嗣はおはりに、年月の下頭にかけり。臨済下の尊宿に、かくのごとくの不同ありしるべし。

《青龍寺切》

先師天童堂頭、ふかく人のみだりに嗣法を称することをいましん。先師の言は、これ古仏の会なり、叢林の中興なり。みつからずまたならん衆衆をかけず。芙蓉山の道楷禪師の衲法衣つたはれりといへども、上堂陞座にもあみず。おほよそ住持職として、またならん法衣、かつて一生のうちにかけず。ころあても、物しるをも、ともにほめき、真善知識なりと尊重す。先師古仏、上堂するに、つねに諸方をいましめていはく、近來おほく祖道に名をかれるやから、みだりに法衣を搭し、長髪をこのみ、師号に冒するを出世の舟航とせり。あはれむべし、たれかこれをすくはん。うらむくは、諸方長老無道心にして、学道せざることを。嗣書・嗣法の因縁を見聞せるものなほまれなり、百千人中一箇也無、これ祖道陽違なり。」かくのごとくよのつねにいましむるに、天下の長老つらみず。しかあればすなはち、誠心辨道することあらば、嗣書あることを見聞すべし。見聞することあるは、学道なるべし。

《瑞雲院切》

臨済の嗣書は、まづその名字をかきて、「吾子われに参す」ともかき、「わが会にきたれり」ともかき、「入道堂」ともかき、「嗣吾」ともかきて、ついでのごとく前代をつらぬるなり。かれもいさかいひきたれる法訓あり。いはゆる宗趣は、嗣はおはりはじめにかけはれず、たゞ真善知識に相見する、的々の宗旨なり。臨済にはかくのごとくかけるもあり、まのあたりみしによりてしるす。

了派藏主者、威武人也、今吾十也。徳光参侍径山杲和尚、径山嗣來山勤、勤嗣楊岐演、演嗣海全端、端嗣楊岐云、今嗣慈明円、円嗣汾陽昭、昭嗣南院願、願嗣興化契、契是臨済高祖ノ長嫡也。

これは、阿耨王山仏照禪師徳光、かきて派無際にあたざるを、天童の住持なりしとき、小師僧知拙庚、ひそかにもちきたりて、了然寮にて道元にみせし。ときに大宋嘉年七年甲申正月二十一日、はじめてこれをみる。喜感いそげぞ。すなはち仏祖の冥感なり。焼香并拝して披看す。この嗣書を請出するときは、去年七月のころ、師仏都守、ひそかに寂光堂にて

《長田切》

道元にかたれり。道元ちなみに都寺にとふ、「如ふたれ人かこれを帯持せる。」都寺いはく、「堂頭老澤那裏有相似、のちに請出ねんころにせば、さだめてみすることあらん。」道元のごとばをきくしより、もとむるころさし日夜に休せず。このゆへに今年、ねんころに小師の僧知庚を口請し、一片心をなけて請得せりしなり。そのかける地は白絹の表背せるにかく、表紙はあかき錦なり。軸は玉なり。長九寸ばかり、潤七尺余なり。閑人にはみせず。道元すなはち智庚を謝す。さらに即時に堂頭に参じて焼香、礼謝無際和尚。ときに無際いはく、「遮一段事、少得見知、如ふ老兄知得、便是至道之美帰也。」ときに道元、喜感無勝

のちに寶慶のころ、道元、台山・雁山等に靈遊するついでに、平田の萬年寺にいたる。ときの住持は福州の元叟和尚なり。宝鑑長老退院のち、叟和尚補す、叢席を一興せり。人事のついでに、むかしよりの仏祖の家風を往来せしむるに、大鴻・仰山の全嗣話を君奉するに、長老いはく、「曾着我箇裏嗣書也否?」道元いはく、「いかにしてかみることをせん。」長老すなはちみつからたちて、嗣書をさくづけていはく、「這箇はたとひ親人なりといへども、たとひ侍僧のとしをへたるといへども、これをみせしめず。これすなはち仏祖の法訓なり。しかあれども元叟ひろ出城し、見知府のために在城のとき、一夢を感じるにいはく、大梅山法常禪師とおほしき高僧ありて、梅花一枝をさしあげていはく、「もしすでに船舷をこゆる美人あらんには、花をおしむとなかれ」といひて、梅花をわれにあたふ。元叟おほく争して夢中に吟じていはく、「未踏船舷、好与三十。」しかあるに、不経五日、与老兄相見、いはんや老兄すでに船舷跡来、この嗣書また梅花綫にかけり。大梅のおしむところならん、夢草と符合するゆゑにとりいだすなり。老兄もしわれに嗣法せんともむむ。たとひもとむども、おしむべきにあらず。「道元、信感おくところなし。嗣書を請すべし」といへども、たゞ焼香礼拝して、恭敬供養するのみなり。ときに焼香持者法鑑といふあり、はじめて嗣書をみるといひき。道元ひそかに思惟しき、この一段の事、まことに仏祖の冥資にあらざれば見聞なほかたし、辺地の愚人として、なんのさいわいありてか数番、これをみる。感涙霑袖、ときに維摩室・大舍堂等に、閑閑無人なり。この嗣書は、落地梅綫のしろきにかけり。長九寸余、潤一尋余なり。軸子は黄玉なり。表紙は錦なり。道元、台山より天童にかへる路程に、大梅山護聖寺の目過に宿するに、

大梅祖師きたり、開化せる。一枝の梅花をさくくる霊夢を感す。祖鑑もとも仰憑するものなり。その一枝花の縦横は、杏尺余なり。梅花めに優曇花にあやらんや。夢中と覺中と、おなじく真実なるべし。道元在宋のあひだ、愷園よりのち、いまだ人にかたらず。いまわが洞山門下に、嗣書をかけるは、臨済等にかけるにはことなり。仏祖の衣裏にかかれりけるを、青原高祖としく曹溪の几前にして、手指より浄血をいだしてかき、正伝せられけるなり。この指血に、曹溪の指血を含して書伝せられけると相伝せり。初祖・二祖のころにも、合血の儀をおなはれけると相伝す。これ、吾子参吾、なほかず。諸仏および七仏のかきつたへられける嗣書の儀なり。しかあればしるべし、曹溪の血氣はかたしけず、青原の浄血に和合し、青原の浄血したしく曹溪の親血に和合して、まのあたり印証せることは、ひとり高祖青原和尚のみなり、余祖のおよごころにあらず。この事子をしれるともがらば、仏法はたゞ青原のみに正伝せると道取す。

《興聖寺切①》